

# 浪江の こころ通信

・第18号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第18号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243-22-4218



※この欄には、連絡がとれた方のみ掲載しています。住民票を町外に異動された方で、掲載希望の方はご連絡ください。

復興推進課情報統計係 TEL0243-62-4731

## お誕生

出生届は14日以内に

子どもの名(性別)	親の名	住所
9月		
山下 晃季 男	智昭・梨乃	大 堀
後藤 聖悠 男	士朗・美佳	川 添
10月		
山田 凌太朗 男	好彦・麻紀子	大 堀
猪戸 秀篤 男	正弘・由香	樋 渡
佐藤 聖空 男	和樹・三月	加 倉
佐藤 幸大 男	博道・久美子	苅 原
小澤 哩久 男	正彦・美幸	室 尻
鎌田 利幸 男	春樹・絢子	田 尻
佐々木 豪 男	時弥・葉月	田 尻
桑原 連 男	宏明・智恵	川 添
宮城 有里 女	新司・一恵	川 添
吉野 月愛 女	祐一郎・和江	川 添
逸見 真佳 女	大介・未希	幾 世
菊池 真優 女	政行・こづえ	権 現
小川 斗斗 男	大輔・直美	大 堀

## お悔み

死亡届は7日以内に

死亡者名	年齢	住所
白根 フサ子	94歳	権 現 堂
北 幾世	96歳	北 幾世
吉崎 康	81歳	両 現 竹
松本 トヨ子	96歳	権 現 堂
時田 ナツエ	89歳	立 野
菅野 眞二	80歳	北 幾世 津
菅野 眞二	72歳	下 津
原下 タマリ	82歳	榎 堂
今中 カホル	85歳	権 現 堂
高木 広	53歳	榎 堂
菅野 喜美子	98歳	加 倉
岩野 久	82歳	川 添
井手 善作	75歳	井 手
渡部 尊	80歳	井 手
渡部 久	87歳	幾 世 橋
江畑 アヤ子	76歳	川 添
横山 秀夫	82歳	立 野
太田 夫	79歳	立 野
門馬 常子	93歳	酒 添
石川 操	80歳	高 瀬
門馬 フミヨ	90歳	末 森
佐々木 彌	100歳	権 現 堂
柚原 康男	82歳	北 幾世 橋
向山 善子	79歳	川 添
佐藤 タカ子	86歳	榎 堂
酒井 サタノ	80歳	榎 堂

## 浪江町への義援金

11月12日現在、1,104件3億6,986万7,452円の義援金が寄せられています。このうち、3億5,274万7千円が町民の皆さまへ配分されています。皆さまの温かいご支援、ありがとうございます。

## 南相馬市大木戸 応急仮設住宅(仮称) 入居者募集

南相馬市大木戸地内(石神第二小付近)の応急仮設住宅への入居者を募集しています。  
▽対象世帯  
平成23年3月11日時点で浪江町に住所を有しており、自力で住居を確保することが困難な世帯のうち、制度上の制限を満たし、現在就労・就学・通院の理由により住宅が必要な世帯。  
※制度上の制限とは、住替えの有無や入居人数と間取りの整合性など  
▽募集期限 12月14日(金)  
▽仮設住宅の概要  
全70戸 すべて2K  
※原則2名以上の入居

## ロタウイルス ワクチン無料接種

ほとんどの乳幼児が一度はかかるロタウイルス胃腸炎は、吐いたり、下痢をしたり、脱水症状で入院になったりすることもある重症化しやすい病気です。乳幼児をロタウイルスから守るためWHO(世界保健機関)ではワクチン接種を推奨しています。福島県の津波被災の方、避難区域の方、自主的避難の方は、ロタウイルスワクチンが無料で受けられます。  
▽対象者  
●福島県内で津波被災により住宅が全半壊した家族より被災後出生した生後20週未満のお子さん

## 生活支援課住宅支援係

TEL 0243-62-0194

●東京電力福島第一原子力発電所事故により避難区域に指定された区域に住所を有する世帯にて事故後出生した生後20週未満のお子さん  
●前記避難区域以外の福島県に住所を有し、事故後自主的に避難した家族より出生した生後20週未満のお子さん  
▽期間 平成25年3月31日まで(ただし、予算終了まで)  
▽接種費用 無料  
▽申し込み方法  
小児の予防接種をしている医療機関に直接お申し込みください。  
\*住民票や保険証、罹災証明書、健康保険一部負担金等免除証明書等の証明できる書類等が必要となります。  
▽問い合わせ先  
福島県小児科医会事務局(竹内こどもクリニック内)  
TEL 024-533-4150

## 「みんなのれんらく帳」をつくろう ~作成にご協力ください~

町では、NTTタウンページ株式会社様の発行協力を得て、希望者の方の避難先住所や電話番号を掲載したれんらく帳を作成します。このれんらく帳は、町民の皆さまをつなぐ、きっかけのひとつとして活用いただきたいと思います。作成するにあたり、避難先世帯の代表の方へ別途「れんらく帳への掲載承諾書」を送付しています。また、お手元に届かない場合は、ご連絡ください。多くの皆さまのご協力をお願いします。

氏名	電話番号	郵便番号	避難先住所	行政区
浪江 太郎	0243-62-0123	964-0984	福島県二本松市北トロミ573	幾世橋
秋桜 花子	080-XXXX-△△△△		■県●市	酒井
赤松 次郎	090-XXXX-△△△△		■県●部▲▲町	加倉
浪江 心	000-□□□□			5区

氏名と行政区以外の掲載は「電話番号と住所の一部だけ」「電話番号のみ」「住所のみ」など自由に組み合わせることができます。

※れんらく帳への掲載は、世帯の代表者だけに限りません。同一世帯の方も個別に掲載することができます。

生活支援課避難生活支援係 TEL0243-62-0305





## 泉田 尚男さん・恭子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：11月15日

### 孫たちの将来に期待し、 自分たちの暮らしを楽しみたい

泉田さんご夫婦は、震災後、千葉市に避難。  
来年春には、国分寺市での再スタートを決めました。



■尚男さんのお話  
3月11日、地震が起きたとき、私は海までサイクリングをしていました。妻は、近所の人から「海の近くで見かけた」と教えられ、とても心配したと言います。急いで自宅に帰り、家族と一緒に近くの警察署の上階に避難しました。その後、息子夫婦と孫たちの6人で、千葉市にいる親戚を頼って、ほとんど着の身着のまま避難しました。いったん、親戚の家に世話になり、嫁と孫たちは徳島の嫁の実家に、

私たち夫婦と息子は3月24日に、このマンションに入居しました。私は、中学から大学まで東京で暮らし、就職してからは転勤の連続で、数十回もの転居を繰り返してきました。福島県職を定年退職して10年。近くの海や山へのサイクリングを楽しむなど、悠々自適な生活でした。ここにきて半年ほどは、気持ちが悪くなり、落ち込んで何もする気にならなくなりました。食べるものもおいしくなく、痩せるほどでした。でも、妻のがんばりや孫の成長を見る中で、ふさぎ込んでばかりいてはいけないと思うようになりました。

住んでいるマンションの近くには、公園や「花の美術館」などの施設がありサイクリングを楽しむ日々です。周辺は緑や花が多く、整備された街並みですが、自然の豊かさが感じられません。そこで、ときどき妻と一緒に旅行に出かけ、山歩きも楽しんでいます。

■恭子さんのお話  
私は、浪江町で薬局を営んでいました。薬局のお客さまは、ほとんどが顔見知りで、会話を楽しみながら商いをしていました。息子夫婦も跡を継いでくれ、仕事も家庭生活も安定していました。震災後、4回、一時帰宅

をしました。私が、最後に行ったときは、家の荒れようがひどく、つらくて家の中に入るのができませんでした。  
千葉での暮らしは便利ですが、浪江との違いを感じる場面も多々あります。以前の暮らしでは、家に鍵をかけることなど、ほとんどありませんでした。ここに来てからも、夏には、玄関のドアを開けて風を入れていたのですが、親戚や宅急便の配達の人に、物騒だからと助言を受け、最近では、家にいるときでも、鍵をかけるようになりました。水や食べ物の味も違い、スーパーマーケットに並ぶ魚には、手が出ませんでした。先日、震災後、初めてお刺身を買って食べました。無いものねだりをしていても仕方ありません。諦めることもしなくてはと思います。

今、息子夫婦は、国分寺に住み、薬局開局の準備をしています。小学校1年生と3年生の孫たちの成長も楽しみです。私たちも、来年春には国分寺市に引っ越し、薬局経営を手伝う予定です。震災で失くしたものは、たくさんあります。でも、いつまでも後ろを向いてばかりでは生きていけません。孫たちの将来に期待し、自分たちの暮らしを楽しみたいと思うのです。



## 渡辺 理恵さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島  
取材日：11月12日

### たくさんの人に支えられ、 4人の子どもたちから元気をもらって

南相馬市、福島市、群馬県片品村と、避難先を転々とした渡辺理恵さん。昨年8月からは、ご主人と4人の娘さんの6人家族で仙台市の借り上げ住宅で暮らしています。避難先では多くの人に支えられ、うれしい出会いもあったとか。度重なる引越し、転校を余儀なくされたお子さんも、それぞれたくましく成長。ふるさと・浪江での思い出を心の糧に、「毎日、頑張っています！」。

■引越しに次ぐ引越し  
震災後は一旦、私の実家の南相馬市原町に避難し、原発事故の後、福島市の知り合い宅に身を寄せました。でも長く居てはご迷惑になるので、3月後半からうちの家族と義父母は群馬県片品村に、そして私の両親は埼玉県へと別々に避難したんです。先の見えない不安な毎日でしたが、片品村では地域ぐるみでボランティアの皆さんが何から何までお世話してくださって。子どもたちの学校の手配やご飯の世話、ランドセルや衣類まで揃えてくださったり。本当にありがたかったです。

ばこの方たちと会うことはなかった、ご縁で不思議だなと思います。浪江で親しくしていた友人は避難先がばらばらで、寂しくてたまらないこともあります。携帯で連絡を取り合っています。

■思い出を胸に、明日へ  
避難生活で一番辛いのは、なれない土地で何もすることがないこと。片品村でも初めはご厄介になるばかりで心苦しかったです。夏場、民宿のお手伝いをするので気持ち楽になりました。その点、仙台は専門学校時代に毎日通った馴染みのある街です。子育てに追われていると月日が経つのがあつという間ですね。長女のまどかは中1、次女の悠夏は小5、3女の萌々華は小2、末娘の凜花は2歳になりました。

上の子は震災後、片品、仙台と小学校を2回転校しました。「浪江に帰りたい」と涙ぐむこともありました。子どもたちは順応性が高いのが救いです。今、上のお姉ちゃん2人は部活に夢中。悠夏はピアノも習い始めました。萌々華は学校から帰るなりお友達と遊びに行っちゃう元気な子ですが、最近学習塾に行きたいと言っています。こういう状況なので、本人がやりたいことはやらせてあげたいねと主人と話しています。



▲「懐かしい浪江の皆さん、またお会いしたいです。」と渡辺さん。次女・悠夏ちゃん、末娘・凜花ちゃんと一緒に。





## 館内 進さん・那奈さん(西台)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会アミル 柴田  
取材日：11月11日

### 消防団の皆さん、行きつけのお店「ブラカイ」で また楽しく飲める日を楽しみにしています



▲左：那奈さん、右：進さん  
長男・夢斗くんはサンタの服をきてパチリ！

2010年7月に結婚し、西台地区で暮らしていた館内さんご夫妻。浪江町ではお米屋「館内商店」を営んでいました。今年7月に長男・夢斗くん(4カ月)が生まれ、山形市内の借り上げ住宅に家族3人で暮らしています。

浪江町で米屋を営んでいましたので、3月11日地震が起きたときは、倉庫で米の配達準備をしていました。ただごじやない大きな長い揺れに驚き、店に戻りました。店の中は、階段が外れて、お店の入口もガラスがすべて割れ、壁にびひも入っているとてもひどい状態でした。妻は、海が近いドラッグストアに勤務していて、回ってきてくれた警察の方に「津波が来るので、避難しないと飲み込まれる」と言われ、従業員の方と山の方

へ避難し無事でした。私の所でも「津波だから逃げろ」と言われ、すぐ私の両親と祖母と私の4人で、車で逃げました。1日は、自宅で過ごしましたが、余震がひどく寝たかどうか覚えていないくらいです。その後、何か所か避難所を転々とし、両親から「先に逃げなさい」と言われ、妻の実家がある山形県に2人で避難しました。ガソリンがなかったのですがなんとか仙台まで避難し、その後山形の父が迎えに来てくれ避難することができました。3カ月ほど実家で生活させてもらい、借り上げ住宅が見つかり今は山形市に暮らしています。

仕事でお世話になっていた方やお客さんですが、仲がいい人ほど、お互いつらい状況というところがわかるので、すぐに連絡は取れませんでした。相手も大変な状況、大丈夫ではないことがわかってるので、今も連絡をできない方も多いです。こちらでは車で職場に通っていますが、山形の雪の多さに驚かかったので、冬タイヤもはいた

聞いていますが、緊急時、時間に猶予がない病人が安心できる仕組みや対策があればと感じました。娘はぶどう、ラフランス、米をつくる農家に嫁いたので仕事も忙しいようですがしょっちゅう来てくれ、感謝しています。孫が小学校の帰りに遊びに寄ることも楽しみの一つ。浪江にいたころは、毎年夏に遊びに来て、海へ遊びに連れて行っていただけを思い出します。今思うと、浪江は海あり、山あり、川ありで、食べ物もおいしく、住んで最高の場所でした。こちらでは高島町の福祉課の職員の方が月に3回ほど訪ねてくださり、避難者の交流会の案内や町の情報を届けてくれます。町内の方も、畑で作った野菜をくださったたり、雪はきを手伝ってくれたり、山形の皆さんは親切で温かく不便なく生活しています。



## 原田 鶴次さん(権現堂)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会アミル 齋藤・柴田  
取材日：11月9日

### 浪江の皆さん、元気で暮らしています

原田さんご夫妻は、山形県高島町の借り上げアパートで生活しています。鶴次さんは腎臓の病気を持っているため、現在も1日おきに透析を受けています。避難翌日から、透析を受けられる病院を探し福島県内を転々とし、避難から4日目、高島町の病院で無事透析を受けることができたそうです。



▲左：鶴次さん 右：節子さん  
近くに住む3人のお孫さんと会うのが何より楽しみ！

地震の後はず、中学校に避難しました。余震が怖くて家には入れなかった。朝起きたら原発が爆発するからと言われ、すぐに町から避難しました。まずは、透析を受けられる病院を探しに行くことが先決と考え、町の皆さんが避難した津島ではなく、原町の病院に向かいました。ですが、患者さんがいっぱい受けて入れてもらえず、福島市や川俣町の病院など何件か回ったのですが、どこでもともと利用していた患者さんで手いっ

ばいのように受け入れてもらえませんでした。ガソリンがなかったので車の暖房もつけないで、妻と病院を探しました。探している途中で山形県高島町に嫁いだ娘と連絡がとれ、病院を探してくれ、うまく空きがあったこちらの病院で受け入れてもらい、避難から4日目に透析を受けることができました。透析を受けられなかった場合心臓に負担がかかり命も危なくなるので、ここでもだめだったらと死を覚悟しました。本当に大変でした。今は、一日おきに歩いて病院に通っており、だいぶ落ち着きました。

こちらに避難している浪江町の方が何世帯かいると聞きました。避難者交流会でお会いした方もいて、浪江の人と話をするだけでも違うと思いました。避難が長期的になるようなら、町の皆さんとつながりがなくならないよう、連絡手段があればと思っています。透析の仲間も100名ほどいたので、皆さん大丈夫だったか心配です。震災時、福島県内では透析が受けられず、関東方面に行った仲間が多いと





## 鴨川美江子さん(川添)

取材者：元気玉プロジェクト 榎木  
取材日：11月16日

### 新たな仲間とともに趣味を楽しむ



▲今年10月に催された秀明会作品展の出品作とともに。

現在は、会津若松市のアパートでご主人や息子さんと3人で暮らしている鴨川さん。今の暮らしを大切に、新しい友人との交流や趣味を楽しみながら、笑顔で過ごしていきたいと考えていらっやいます。

浪江町では保険のセールススタッフとして働き、忙しいながらも充実した毎日を過ごしていました。震災のあった日も、いつものように浪江中学校近くの道路を車で移動していました。突然襲った大きな揺れに、なんと車を路肩に停めるのが精一杯で、ハンドルを握りながらそのまま横転してしまうのではと思ったほどです。激しい揺れに家の瓦屋根が一気に滑り落ちていく様子や、波打つように歪んだ道路を子どもたちが一目散に

走っていく姿が、今でもはつきりと思ひ起されます。地割れで段差ができた道路を車で越えてようやく戻った自宅は、家中に倒れた家具や荷物が散乱し手のつけられない状態でした。余震で家が倒壊する心配もあったため車の中で一晩を過ごしました。翌日、テレビで原発事故のニュースを知った主人に促され、葛尾村の親戚宅に犬2匹をつれて避難。その後も伊達市、二本松市、裏磐梯と転々と避難移動は続き、昨年8月中旬に会津若松市で家族3人の新たな暮らしがスタートしました。幸いなことに、浪江町で勤めていた会社の営業所から、会津若松市の営業所に移籍することができ、仕事を継続することができました。親しくしていたいた多くの顧客の皆さんと、またお会いして話ができるのは本当に嬉しいことです。住む場所は遠くなっても、心のきずなはしっかりとつながっているのだなと深く感じています。避難したことで周囲に知り合いが誰もいない状況になりまし

たが、地元の写真店を訪れたことがきっかけになり、写真愛好家の集う『秀明会』に入会しました。写真撮影の経験はありませんでしたが、会員の皆さんが温かく迎えてくれ、一緒に撮影旅行に出かけたりと、新しい友人との交流の輪をひろげています。10月に開催された展示発表会には初めて出品し、さまざまなかから声をかけていただきました。撮影の楽しさに目覚めた私の大きな目標は「人の心に感動が生まれる一枚を撮ること」です。浪江町での思い出は心のアルバムに大切に残しながら、これからの人生に悔いを残さないよう、楽しく充実した毎日にしていこうと思っています。

### お詫びと訂正

「浪江のこころ通信第17号」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

26頁  
(誤) 半谷千代子さん (酒田)  
(正) 半谷千代子さん (権現堂)

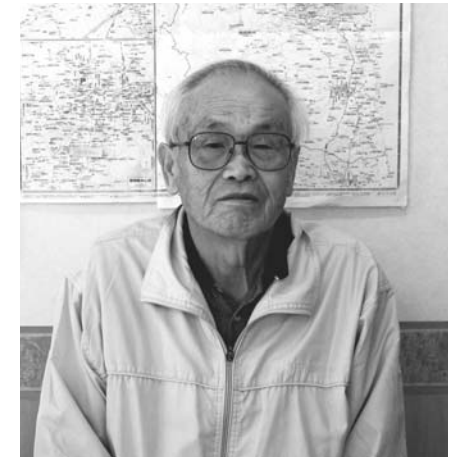


## 伊藤 暢秀さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：11月15日

### 浪江の人に会うたびに「健康との戦いですよ」と励ましています

福島市内の借上げ住宅で奥さまと二人暮らしをされています。この住まいを見つけるために、2次避難先の裏磐梯から福島市に通い、およそ20件は見つめたそうです。この集合住宅には幼なじみも一緒に入居し、その方々と力を合わせて「福島市春日町借上げ住宅浪江会」を立ち上げ、会長として抱え切れないほどのさまざまな問題や課題と日々奮闘されています。



▲「一人暮らしの方の通院や交流会へ出かける“足”の確保がうまくできないものかと常々思っています。」とおっしゃる伊藤さん

■地震当日のことはあまり思い出したくないです  
その日は車検が済んだ車を引き取るため、南相馬市に来ていました。午後2時40分ごろに強い揺れを感じ、午後2時46分のときにはさすがに立っていらなほどでした。結局代車で帰路を急ぎましたが国道6号はすでに渋滞が始まっており、ラジオからは小名浜に津波が到来予想のニュースが聞こえ、浜街道ならと向かいましたが小高で橋が倒壊し渡れなくなっていました。その後、後続の車に戻るように声をかけながら国道6号に引き返し、会社まで帰りました。社員との連絡後、帰宅しまし

たが家には入れず、近所の4家族と妻が日ごろお世話をしていたお年寄りとともに、毛布を抱えて町のホテルに避難しました。サイレンが鳴り響き、パトカーや消防車が行き交っていました。が、原発のことなどまったく知りませんでした。私も食料品卸の会社でしたので、社長の発案でサラダやプリンなどを請戸の方の避難所に差し入れしようと、役場に掛け合せて軽トラ3台で取りに来てもらいました。

■浪江が天国なら、避難生活は地獄でした  
翌朝、会社の片付けをしていたところ、近所から原発のことを初めて聞かされ、私たち夫婦はお世話をしていたお年寄りを連れて10km圏外の小高の親戚を頼りました。夜には避難命令が20km圏となり、原町の石神第一小学校で3日間を過ごしました。同行のお年寄りは家族に引き取りを頼み、私たちは岩沼の息子の所で2カ月近く世話になりましたが、その間、町や県の情報はまったくなく、二本松市の仮役場まで何度も足を運びました。

少しでも町の人たちがいる所へと思ひ、岳温泉へ行きました。が妻が体調を崩し、次の裏磐梯・北塩原村「赤べこ」でようやく気力と健康を取り戻しました。周辺には同級生も何人かおり、声を掛け合せて過ごしていました。■家族や地域がバラバラに。この絆は取り戻せるのでしょうか  
現在、自治会長を務めていますが、浪江への帰還を巡って多くの家族の意見が対立し、バラバラになっています。東電の補償も不透明です。町の復興計画はできましたが、どの地区でどのようにインフラ等が進むのか、もっと具体的に伝えて欲しいと思っています。先が見えるように、何も見えないのです。浪江町民にとっては、これらが本番でしょう。自治会同士の連絡会「福島市なみえ会」は、福島市や伊達郡など約300世帯を支援しています。みんなで支え合い、助け合いながら、暮らしの立て直しをともに考えたいですね。必ず絆は取り戻れます。